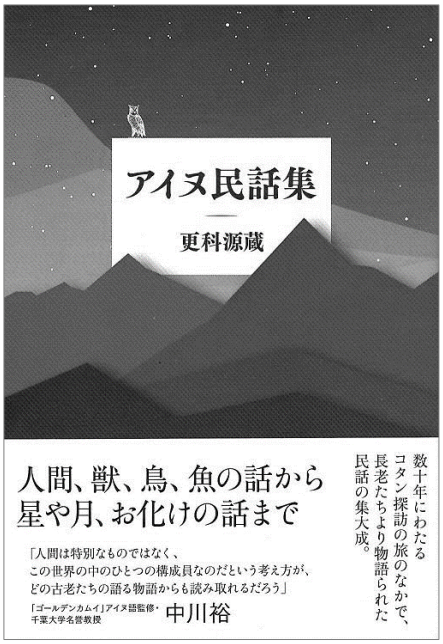
【書評・紹介】

更科源蔵著『アイヌ民話集』

（東京、青土社、2021 年 10 月、四六判、287 頁、2200 円＋税）

阪口　諒



本書は、詩人、アイヌ文化研究者として著名な更科源蔵氏（1904～85 年）が、自ら採集したものを中心に、様々な地域・ジャンルのアイヌ民話を一冊にまとめたものである。底本は、1981 年 6 月にみやま書房から刊行された『アイヌ民話集（更科源蔵アイヌ関係著作集 II）』である。『アイヌ民話集』は、1963（昭和 38）年に北書房から刊行されたのが最初で（以下、北書房版）、1970 年にはその増補改訂版が出ている。

『アイヌ民話集（更科源蔵アイヌ関係著作集 II）』の巻末（本書では 281 頁に当たる）にあるように、本書の底本は、1970 年の増補改訂版に 32 篇の物語を増補した「決定版」である。1963 年の北書房版と比べて話数が大幅に増えた決定版を底本とした本書は、収録された物語の内容が多岐にわたることが、以下に示す目次からも見て取れるだろう。

人間の話（人間創造／人間つくり・三話／あれをどこにつけるか／人間の始祖／文身（いれずみ）のはじまり／人間が一番偉い／女ばかりの島／ポンサマイクルのイム／毛の多いわけ／人間の毛／上の者と下の者・八話／女神の貞操帯（ポンクツ）／地獄穴／死の国の話／あの世への岩穴／狩人ものがたり）

獣の話（ウサギの胆／大ウサギ物語／ウサギの神様／コタンを救ったウサギ／目のうすいウサギ／島にされたトド／大トド／クマとトド／化けそこなったキツネ／悪キツネ／カッパを焼いた灰／オイナカムイの使ったもの／カワウソとキツネ／キツネとカワウソ／うっかりもののカワウソ／カワウソに見込まれた娘／忘れんぼうのカワウソ／カワウソの子供／犬のはじまり／喋れなくなった犬／孤児を育てたネズミ／トガリネズミの酒盛り／化けたキネズミ／アザラシの神と女／けちんぼオオカミ／オオカミの娘／クマとオオカミにほれられた男／尻尾を切られたクマの王／シカに化けた娘／牡ジカの鎧）

鳥の話（カケスの雄弁／スズメの酒盛り／カラスと親子／カラスも大事なものだ／カラスになった若妻／セキレイの土地づくり／木の株に化けたミソサザイ／なまけたシギ／カッコウの懺悔／カッコウの神／コノハヅク物語／セキレイにされた悪キツツキ／尻尾を抜かれたミミズク／談判鳥（チャランケチリ）／親不孝鳥／けちなクイナ／キツツキとオタスツ人／エゾライチョウとエゾフクロウ／あほうどり物語／鶴の薬／白鳥になった娘／ワシの妹）

魚の話（世界はアメマスの上につくられた／フグとカジカとカレイ／ウグイとニシンの競走／マンボウは化物だった／アワビとクラゲ／カジカ／クマをおどかすウナギ／山をひっこ抜いた魚／川貝のてがら／マスの子孫／シシャモ物語／シリカップ物語／鯱（シャチ）に見込まれた女）
虫の話（人間の子供を育てたセミ／意地悪いセミ老人／クモの神／クモと風の神／夫婦を救ったハチの神／魔神を焼いた灰／カになった英雄／ノミとシラミ）
蛇や蛙の話（ヘビに呑まれる蛙／アリやハチになった大蛇（だいじゃ）／アエオイナの道具／カエルにされた悪女（ウエンメノコ）／火の神と天降ったヘビ）
星や月の話（なまけものの姿／強情星／キツネにつかまった日の神／暁の明星／築の番をする星／雷神との闘い）
お化けの話（化物退治（コシンブイ）／利巧な娘／妖婆の罠／木原の妖婆／褌を忘れた酋長／湿地の化物／お椀のくせにカカもっている／国造神（コタンカラカムイ）の道具／五弦琴（トンコリ）の化物／棍棒（シト）のお化／淫魔（バウチカムイ）に見込まれた石狩人（イシカリウンクル）／臼のお婆さん／人食いお化け／旋風のお化け）
草や木の話（フクジュソウ物語／悪い女神の果／フキノトウ／アワのとりもつ縁／コクワとブドウ／ニワトコとハシドイ／ヨモギの矢／ニワトコとウド／ツルウメモドキになった風の神／丸木舟の争い／年老えた丸木舟の話／トリカブトの歌）
あとがき
解説　中川裕

復刊に当たって、本書にはアイヌ語、アイヌ文学が専門の中川裕先生による「解説」が加わっている。「解説」では、更科氏の活動や研究資料としての本書の貴重さが紹介されている。特に、他の研究者があまり調査をしていない地域の物語を数多く含んでいるだけでなく、話者情報が明確に記されている点は、アイヌ文化の歴史的な変遷や環境と伝承の関係などを考えるうえで重要である、ということが具体例を挙げて述べられており、本書の価値を高めている。

実際、宗谷のような他の研究者があまり調査していない地域の物語もいくつか見出すことができる（以下、アイヌ語のカタカナ表記は更科氏のもので、ローマ字表記は評者が追加したものである）。本書には、「ウサギの胆」（56～57 頁）、「島にされたトド」（65～67 頁）、「化けそこなったキツネ」（71～72 頁）、「利巧な娘」（227～231 頁）がある。「五弦琴（トンコリ）の化物」（239～240 頁）も宗谷の伝承だと書かれているが、これは誤りの可能性がある（北書房版では伝承者の記述がない）。Emiko Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore*. (Washington, D.C.: American Anthropological Association, 1969) の第 2 話とほとんど同じ内容なので、樺太西海岸北部の伝承ではないかと今は考えている。更科氏のフィールドノートである「コタン探訪帳」を確認することで明らかにできるのではないかと思われる（参考：齋藤玲子「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について―弟子屈町立図書館所蔵資料の紹介―」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第 11 号、2002 年）。

以上の宗谷の物語は、更科氏の他の著作『アイヌの民俗　上』、『アイヌ文学の謎』（以上 2 冊は、1982 年刊行の『更科源蔵アイヌ関係著作集』に収録のものを参照した）、『コタン生物記』にも掲載されている。本書収録の「化けそこなったキツネ」に関しては、『コタン生物記Ⅱ』303 頁や『アイヌの民俗　上』73 頁、『アイヌ文学の謎』73 頁でも触れられている。キツネに関して、『アイヌの民俗　上』および『アイヌ文学の謎』では、「宗谷では鍛冶

屋の許嫁に化け」るとある。この「鍛冶屋」というのは、『アイヌ民話集』と『コタン生物記 II』から、シュカラカムイであることが裏付けられる（シュカラカムイ su-kar-kamuy「鍋・を作る・カムイ」）。このシュカラカムイの許嫁は「サンナイペッ・モイレマッ」（本書 71 頁）もしくは「シンナイペッ・モイレマッ」（本書 72 頁）であるが、「利巧な娘」では「シンナイペッ・モイレパマッ」（本書 231 頁）とある（モイレパマッは誤植と思われる）。

サンナイ（ペッ）という地名が登場する物語は他にもある（樺太の物語にもサンナイペッ系の地名がよく見られる）。人文神のポノサマィクルとポノオキキリマがサンナイの沖の島（『アイヌ文学の謎』98 頁では海馬島）に行ってトドと格闘する物語（『コタン生物記 II』402～404 頁）もある（沙流地方の類話ではカジキマグロ sirkap との格闘が描かれる）。宗谷が海に面しているためか、海の生き物の物語も多い。明言されていないものの、宗谷のものと判断できる、アトゥイコロヘンケ（ウミガメ）とクントアッコイパ（大ダコ）に襲われたチインレシカルクの物語（『コタン生物記 II』532～533 頁）や、同じくアトゥイコロヘンケが出てくる「ウサギの肝」（本書 58～59 頁）、さらにタラバガニの物語（『コタン生物記 II』528-529 頁）もある。そのほか、キジバト姉（トット・サポ）とカッコォ姉（カッコク・サポ）に育てられていた娘の物語が『コタン生物記 III』622～624 頁に掲載されている。宗谷の物語が予想外に記録されていることに驚くのではないだろうか。

他の宗谷の伝承の記録は、大野延太郎「北海道旅行中の見聞記」（『東京人類学会雑誌』164 号、1899 年）や早川昇『アイヌの民俗』（岩崎美術社、1970 年）に見ることができる。前者は、宗谷や天塩のいわゆるコロポックルの伝承をごく簡単に記録したものである。後者は、信頼のおけるもので、本書『アイヌ民話集』と同じ話者から聞き取った別の伝承を記録しており、非常に参考になる。「ノブクングルに関する口伝」（3～5 頁）や「宗谷アイヌと樺太・石狩アイヌとの物交に関する口伝と記憶」（5～7 頁）、「熊神のお授けによって、霊媒（トゥース）に成れた、老刀自の話」（7～9 頁）などが掲載されているので、本書と合わせて参照しておきたい。

次に、本書に収録された物語のうち、同じ伝承者による語りや筆記が他の資料に掲載されているものを取り上げる。筆者の目に留まったものを列挙したに過ぎないが、本書を利用するうえで役に立つかもしれないので、ここに記すことにする。

まずは、樺太の伝承を取り上げる。樺太西海岸北部出身の話者が語った「アザラシの神と女」（本書 95～97 頁）は、『アイヌ文学の謎』95～97 頁、『コタン生物記 II』394～395 頁にも掲載されているほか、同じ話者によって語られたと思われるものが『アイヌ伝統音楽』（日本放送協会、1965 年）508～509 頁に掲載されている。本書 97 頁では、伝承者の名前がフミコとあるが、これはフシコの間違いである（52～53 頁の「あの世への岩穴」では別の名前が記されているが同一人物である）。この物語はよく知られており、多くの記録がある。原文対訳のものとしては、Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore* の第 7 話や『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料』（「環太平洋の言語」成果報告書 A2-039、2003 年）「言い伝え 5」がある。樺太西海岸南部タラントマリの伝承である「上の者と下の者 III」（本書 33～35 頁）は、アイヌ文化財団のオルシペスウォプで公開されている「この木たおれろ―タン ニー ホラハ―」（https://youtu.be/FG2naTkjSHI）と同様の物語である（URL は 2021 年 11 月 10 日現在有効）。

次に、北海道の伝承を取り上げたい。釧路鶴居村に暮らしていた話者が語った「牡ジカの鎧」（本書 113～117 頁）は、別の調査者がアイヌ語での語りを録音したものがあり、「お

とこ鹿の角のある鎧を身につけた神の物語」として『八重九郎の伝承 6』（北海道教育委員会、1998 年）5〜108 頁に原文対訳で公刊されている（同書「解題」で『アイヌ民話集』「牡ジカの鎧」との差異が言及されている）。また、近文に暮らしていた話者が語った「けちんぼオオカミ」は、『キナラブック・ユーカラ集（旭川叢書第 3 巻）』（旭川市、1969 年）69〜80 頁に、同じタイトルで原文対訳が掲載されている。「臼のお婆さん」（本書 248〜251 頁）は、同じ伝承者が日本語で筆録したものが『森竹竹市ウエペケレの研究』（白老楽しく・やさしいアイヌ語教室、2019 年）に「臼の婆さん」（191〜216 頁）として掲載されている。

本書から逸れてしまうが、更科氏とほぼ同時代に、十勝地方でアイヌの伝承を事細かに記録した人物に沼田武男（1914〜57 年）がいる。沼田氏の記録したアイヌ語テキストは、同時代の十勝の記録として類を見ないほど正確である。近年、沼田氏の記録したアイヌ語テキスト 15 編の対訳が『沼田武男「採訪帖」—アイヌ語十勝方言テキスト集—』（千葉大学アイヌ語研究会、2021 年）として刊行された。評者も沼田ノートの整理に関わったが、「馬のカムイの物語」（同報告書 151〜158 頁）は、更科氏が十勝本別で（おそらく同じ話者から）同様の馬の話を聞き取っていることに気が付いた（『コタン生物記 II』338〜340 頁）。沼田氏の記録したアイヌ語テキストを解釈するうえで更科氏の記録は参考になった。

評者が目についただけでも、他の様々な文献に見られる物語が本書にこれだけ含まれている。それらとの詳細な比較は、アイヌの物語をより良く理解するうえでも、更科氏の記録、解釈の仕方および誤解などを明らかにするうえでも必要な作業となると思われる。

上述のように、更科氏の記録には貴重な価値があるものの、アイヌ語の解釈には不確かな部分が見られることは指摘しておきたい。例えば、本書収録の物語「お椀のくせにカカもっている」（235〜237 頁）は、物語のキーフレーズがタイトルとなっているが、このフレーズを更科氏の提示したとおりに解釈して良いと評者には思われない。本書を読む限りでは、夫の正体がお椀（itanki）だと気づいた妻が、驚いて発したフレーズである。本文には「イタンキ クネテッ クマッコロ（お椀のくせにカカもって）」（236 頁）とある。これが itanki ku=ne tek ku=matkor だとすると、「お椀・で私はある・て・私は妻を持っている（お椀である私は妻を持っている）」と解釈できる。更科氏の書き方では「お前はお椀のくせに妻を持っている」と解するほかないが、この解釈はアイヌ語とどうしても一致せず、物語の中で誰が発したフレーズかが、誤って認識されているのではないかと思われる（本当の姿を妻にさらしてしまった夫の方が思わず「私はお椀なのに妻を持っている」と言った、と解釈する方が自然ではないだろうか）。

アイヌ語、アイヌ口承文芸の研究において、フィールドノート、音声資料の整理・公開は、今後の大きな課題である（更科氏の未公開の資料も膨大であり、必要な手続きを踏んだうえでの公刊が待たれる）。そうした未公刊資料の整理・公刊が大事なのは確かだが、それと並行して、公刊された資料の調査も欠かせない。公刊された資料を突き合わせるだけでも、明らかにできることは数多くあり、本書のような民話集もきちんと把握しておく必要がある。2020 年度に復刊された更科源蔵・更科光『コタン生物記』（青土社、2020 年）とともに、アイヌ文化を学ぶ上で欠かすことのできない 1 冊であることは間違いない。

（さかぐち・りょう／千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程、
日本学術振興会特別研究員）